

03・『性処理係ごっこ』しながら授乳ローションクリイキさせてもらう（自作えっち漫画を読まれたので）

とある年の春。四月二十一日、木曜日。十六時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。室温は二十二度。

昨日より暖かい。

場所は、七緒の自宅、自室。

七緒は今日、十七時からアルバイトがある。

だが、二人は学校から一直線に桐生家に向かう事でなんとか時間を捻出し、晴れて二人きりとなった。

そして早速主人公は、七緒に甘えている。

七緒のベッドの上で、膝枕をされているのだ。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0―5秒ほどまで流して『七緒』のセリフ。その後、音量が小さくなる】

【室外の音が、室内にかすかに聞こえる】

【トラック終了まで流し続ける】

●正面 30センチ

「嬉しそうに。部屋の時計を見て、まだ時間に余裕がある事を確認したので」

……後（あと）三十分位ありますね♥」

七緒、家を出るまでの残り時間を確認すると、身体をぺたん前倒し、主人公の頭に自分の胸を押し付ける。

これによって、少し距離が近づく。

〈主人公〉

「……♥」

主人公、顔いっぱい七緒の胸の感触を堪能しながら、今日も露骨に誘惑される喜びに浸る。

頭はもう、

あゝ……♡ なーのおっぱいだあ……♡

重♡

もお、なーってば、本当にえっちなんだから。

隙あらば、こうやっておっぱいアピールしてくるもんなく……♡

初めてえっちするまでは超真面目、超奥手、超恥ずかしがり屋さんで。

『キスより先に進むのに、何年かかるかわかんないな』って感じだったのに。

今じゃ、当たり前前みたいに人の頭をおっぱい置き場にしてくるよう……♡

はあ、この重み最高。太もものふわふわ感も最高。

優しくてかわいくてエロい彼女、最高……♡

などと、完全にいやらしい事しか考えてない。

このように主人公は、大の巨乳・むちむち好きである。

この事自体は、七緒にも以前から察されていた。

むーちゃんを始めとする主人公の推し女性たちが、高めの割合でそのような体型にあつたからだ。

しかし七緒は、昨日からさらに胸をアピールして来ている気がする。
その理由も、考えればすぐにわかりそうな事なものだ。

だが、鈍感系ラブコメ主人公を地で行く主人公は、またしても何も知らずに、七緒の胸にむぎゅむぎゅされていた。

●正面 15センチ

「きゃっきゃと嬉しそうに。

主人公の顔面に、上から胸を押し付けて遊びながら。

この姿勢になると自分も楽し、胸を押し付けられて主人公も嬉しいはずなので。

『接地した後少し身を引く事で深く押し付け直し、より密着度を高める』という気合の入rippりで、しっかり押し付ける」

ほら先輩♥ むぎゅー♥」

SE2 七緒が主人公に密着する音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「んー……♥」

七緒、正面にいるままささやく。

★正面 ささやき 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「くすくすと嬉しそうに、ひそひそと、あまあまにささやく」
バイト行くまでえっちしよ……♡」※

〈主人公〉

「♡」

主人公、

……もー♡

なーったら、この体勢じゃまともに返事できないって、わかってて聞くんなんなあ♡
それにいくらバイトまで時間ないからってさあ。

部屋に着いてすぐ、そんな直球で誘ってくるとか。ちょっといやらしすぎないか？

あー……性欲強い彼女を持つと大変だなあ♡

もちろんわたしだってそのつもりで来てるから。答えはイエスに決まってるけど……♡

と、一人にやにや、もじもじとする。

今日は元々、ほんの数十分しか一緒にられない。

そんな中、ただおしゃべりをしたいなら、二人はバアドモールに向かってもよかったはずだ。

だけど、そうはしなかった。

放課後合流してすぐ、手を繋いで歩きながらドキドキと

『うち、来ますよね……♡』

『……うん♡』

と会話してここに来た。

その時点で、何をするかなんてわかりきっている。

しかし、恥ずかしがって切り出せずにいると、時間はどんどん失われてしまう。

それを防ぐための『単刀直入なお誘い』なのだと思うと、主人公はもう、めっちゃくちゃに興奮してきた。

七緒、通常の話し方に戻る。

●正面 15センチ

「リラックスしてため息をつく。

自分の胸を主人公の頭に乗せながら。

七緒は普段、自分の胸をアピールする事を一切しない。

ふしつけない視線を浴びたくないからだ。

当然、机などに胸を乗せる事もしない。

なので、普段は己の胸の重さを『当然存在するもの』として認識している。

だが、こうして主人公の頭に胸を乗せていると、想像以上に楽である。

だからいつも『ああ、こんなに楽になるものなのか。自分の胸は、そこまで重く、負担だったのか』と実感し、少し驚いてしまうのである」

はー♥ こうやって顔におっぱい乗つけとくの、ほんと楽。

「あまあまに、しれっと。

現実的には不可能な事を、まるで簡単に実行できる仕事かのように言う。その位、この体勢が楽なので。

『おっぱい置き』で一つの単語。」

先輩。私のおっぱい置きになる仕事しません？」

〈主人公〉

「んー？ おっぱい置きい……？」

主人公、魅力的な誘いにうっとりしつつ、

わあ……♡ いいなあそれ……♡

あーでもわたしには、プロの漫画家になってなーをお嫁さんにもらうという夢があるからなあ……♡

他のバイトをするなら、今は絵の仕事を入れたいんだなあ……♡

などと、真剣に悩んでいる。

なので、顔を胸に圧迫されたまま、ふがふがと返事をする。

〈主人公〉

「うーん……♡ それはすっげえ魅力的な求人だけどさあ……♡

そもそも、おっぱい乗せたままどうやって生活するんだよ……♡
常時膝枕で移動しちゃうのか？」

●正面 15センチ

「リラックスしてうつとりしながら、しれっと。

まるで、簡単に実行できる仕事かのように、現実的には不可能な事を言う。

その位、この体勢が楽なので」

そう♡ この体勢で。このまま移動して暮らすんです。

私先輩に膝枕するの、大好きだし♡」

〈主人公〉

「……うん……♡」

うん……わたしも、なーに膝枕されるの、大好き……♡

と、主人公が言おうとすると。

●正面 15センチ

「【上機嫌でにここにこと。

本当はしばらく『おっぱい置き』に甘えて楽がしたいが、そうしていると時間がなくなってしまうそうなので」

まあ♡ それはさておき♡」

ふいに七緒が身体を起こした。

これによって主人公の視界は、急に開ける。

だが、それでもその先に広がるのは、七緒と、七緒の部屋にあるものだけだ。目の前が見えなくても、見えるようになって。

変わらず幸せすぎるなんて、いよいよ目が回りそうだ。

SE3 七緒が移動し、ベッドが軽くきしむ音

【最初から最後まで流す】

SE4 七緒がブラウスを脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

七緒、少し離れる。

● 正面 30センチ

「くすくすと上機嫌で、嬉しそうに。

ブラウスのボタンを全部外して、ブラジャーに包まれた胸を主人公に見せている。
以後すべて『なー』は『七緒』のあだ名」

ほら……どうぞ♡

先輩の大好きな、なーのおっぱいですよ♡

【『吸いたいでしょ?』という意味で言っている】

ほら♡ もうちゅっちゅしたいでしょ?」

〈主人公〉

「♡」

……はい。したいです。めちゃくちゃしたいです。

年下彼女にめっちゃ甘えさせてもらうあまあま授乳プレイ、したいです……♡

主人公、素直にこくこくと頷くものの、今日は完全にそれ目的でここに来ている事実、
多少の罪悪感も覚えてしまう。

だが七緒は、そんな主人公の欲望も、申し訳なさそうなそぶりさえいとおしいようだ。
にやにやと両手を自分の背中に回すと……『見て下さい』と言わんばかりに、こちらを

見下ろしてくる。

●正面 30センチ

「息づかいのみで表現する。

小さく喘ぐように。

ブラジャーを外す時は、独特の解放感と恥ずかしさがあるので」

んっ……♡

「小さく、ほっとしたようなため息をつく。

ブラジャーを外して、胸がとても楽になったので」

……ふう」

だけどその途端、自分から下着を脱いでおいて、七緒はちよつと恥ずかしそうにする。

こんな時の照れたようで、でも嬉しそうな七緒の顔が、主人公は大好きだ。

どれだけ積極的になっても、根本的には恥ずかしがり屋で奥手という、本来の性格が垣間見える気がするからだ。

そう。昨日のように時間がある中、たっぷりと、じつくりと攻められるのもいい。

だが、今日のように『時間のない七緒』が取る行動は、こんな風に、かえって人柄を感じてきつかけになる。

それはなんだかえっちすぎて。主人公は、あっという間に興奮させられてしまうのだ。

SE5 七緒がブラジャーを脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

●正面 30センチ

「【にやにやと嬉しそうに。

一部始終を凝視していた主人公と目が合ったので。

外したばかりのブラジャーを見せ付けながら、主人公がじっと見ていた理由について、憶測を述べる】

えー？

ブラ取った時の、おっぱいが楽になって

【ちよつとわざとらしく。

胸が揺れる擬音の『ふるん』を言葉で表現している】

ふるん ♡

って揺れるのが好きなの？

やらしー ♡ ほんとにおっぱい好きですよね」

〈主人公〉

「うう……♡ うん。好き。すごい好き……」

ぐうの音も出ない。

主人公、七緒の指摘をおとなしく認めると、正直にその胸を凝視する。

このように今では巨乳好き丸出しの主人公だが、七緒と交際するまでは、まだ言い訳ができた。

『いくらわたしが巨乳女子キャラばかり見て描いてるって言っても、それはそういうイラストが好きだってだけ。現実の恋愛でもそれが適応されるかどうかなんて、わかんないよ』などと苦しい主張をし、己の嗜好をギリギリ認めずにいる事ができた。

だが、七緒と交際してよくわかった。主人公は大きなおっぱいが好きだ。

特に七緒の胸がいいというか、だんとして七緒の胸がいい。

七緒がいれば、生涯七緒以外の女性の胸は見れなくて全く構わない。

そう思う位、七緒の胸は最高すぎる。

『華奢な身体に、ギリギリのバランスでついた大きな胸』というだけでフィクションじみているのに、それはアンダーバストが細すぎるがゆえのカップサイズであると、数字でもダメ押ししてくるのがすごい。

以前七緒が『見ていいですよ♡』なんて言うからブラジャーを見せてもらった事がある

が、その時は『F65』の65って、一番細い人のサイズだ……!』と驚愕したものである。

かくして主人公は、むーちゃんのような『全体的にむっちり、かつ巨乳体型好き』から、七緒のような『華奢巨乳好き』にもなって守備範囲を拡大した。

これまで七緒のような体型の女性は、主に二次元か、芸能界に存在するものだと思っていた。

しかし、それは違うとわかった。

それどころか、好きな人がその体型という奇跡が起きた。

こうなった以上、もう、華奢巨乳大好き人間になるしかないだろう。

●正面 30センチ

「ふと思い出して。

昨日の一件、本編トラック02での出来事を思い出して。

確かに本編トラック02では、主人公に胸を吸わせる事がなかった。

なのであの後、たっぷりそちら方面でも奉仕したのだが、主人公はそれでも足りなかったようなので」

てか、昨日、あの後（あと）も一杯したのに。

お乳吸い足りなかったんですね♡

「優しくあやすように。」

昨日の行為で『授乳要素』が少なかった事を詫び『今日は好きなだけ吸ってほしい』という意味で言っている」

よしよし、いい子いい子。

ごめんね♡

お口淋（さみ）しくて。

今日は好きなだけちゅぱちゅぱするんですよ♡

【にやにやと嬉しそうに。

またも、現実にはあり得ない事を、実際に起きている事かのように言う。

当然七緒の胸は、主人公が毎日吸わなくても、張ったり痛くなったりする事はない」

私のおっぱい。先輩が毎日ちゅっちゅー♡

ってしないと、ぱんぱんに張って痛くなっちゃいますから」

七緒、正面にいるままささやく。

★正面 ささやき 30センチ ※マークのセリフまでささやく

「【あまあまに、にやにやと。

主人公が吸いやすいように、主人公の頭により近い左胸を持ち上げて、吸うように促し

しながら」

なーのお乳飲んで？」※

〈主人公〉

「うん……♡」

主人公、七緒に優しく頭を撫でられ、支えられると、ぽふんと裸の胸に顔を当て直す。そして、そのやわらかな乳首を口に含んだ。

〈主人公〉

「……♡」

こうして主人公は、愛撫を始める。

最初はれろっと、下から上に向かって優しく舐め。

これによって一気にわかりやすく勃起した乳首を、はむっとくわえる。

それから、舌先でその先端をちろちろとたっぷり刺激してから……丁寧に吸い付いていく。

七緒、通常の話し方に戻る。

●正面 30センチ

「小さく、びくつと喘ぐ。

主人公が自分の乳首をくわえ、吸い付き始めたので。

相変わらず愛撫の仕方が丁寧で的確過ぎて、これだけでもものすごく気持ちいいので」

あ………♥

【※6回※ ゆっくりと呼吸する。

快感に耐えながら。

以前聞いた音声作品のレビューにあった『授乳プレイ中にあまり喘がれると集中力がそがれる』という意見を意識している。

七緒としては『何とも言えない。悩みどころだ。先輩とか好きなキャラクターならどんな反応でもかわいいから喜んじやうけど、あまりにキャラクターの性格と反応が噛み合っていないと、少し残念かも』と思った。

しかしその結果『えっ。私のキャラクターってどっち？ 喘ぐ方が自然？ 不自然？』と、新たな悩みが生まれてしまった。

つまり七緒は今、勉強しすぎたあまり『現実の恋人としての反応の良し悪し』と『音声作品のヒロインとしての反応の良し悪し』がごっちゃになり、混乱している」

はあ、はあ、はあ……♡
ふー。ふー。ふー……」

〈主人公〉

「ちゅぱっ……♡ あむっ。ちゅぱっ……♡」

主人公、うっとり目を閉じて舌と口で七緒の乳首を味わいながら、手は吸っていない方である右胸を愛撫して、七緒の快感を高める。

勃起あがった乳首を倒してくりくりと転がしたり、根元を軽くつまんでから小さくこねたりと、優しく、だけど七緒の一番好きないじり方をする。

同時に『ちゅっ♡ ちゅっ♡』と、わざと音を立てて吸い、耳からも七緒の興奮を煽るのも忘れない。

七緒の胸は大好きだ。

だが、七緒自身の事は、当然それよりもっと大好きだ。

そうである以上、主人公は可能な限り『自分だけが気持ちよくなる事態』は避けたいと思っている。

昨日のように完全受け身でいじめられるプレイならまだしも、今日はあまあまいちやらぶセックスだからだ。

だから主人公は今、たっぷり甘えさせてもらいながら、丁寧に攻めてもいる。
無心で、自由にしゃぶったり、思うままにこねているようなふりをして。

本当は細心の注意を払いながら、七緒のリアクションに集中し、一番彼女が喜ぶ行為を探っている。

本当は乳首をいじられるのが大好きなせに、あくまで『先輩がおっぱいプレイ大好きだから、仕方なくしてあげてるんです』というスタンスを取る七緒に。

全く気付いていないふりをしながら、丹念に気持ちよくしてあげようと思っているのだ。

七緒、通常の話し方に戻る。

●正面 30センチ

「ゆっくりと呼吸する。

はー……
♡

【※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。
今思い出したように話を振る。

しかし、実際は『今日えっちする時、この話ししよ』とあらかじめ考えていた話題である。

また、話す事で、快感から意識をそらそうとしている。

すでに気持ちよくて身体が逃げそうになるが、必死に耐える。

話題は、主人公が『例の新アカウント』にリンクを載せていた、自作アダルト漫画について。

主人公は別のイラスト投稿SNSに、アダルト漫画用のアカウントも作っていたので。

『新アカ』は『新アカウント』、『シチュ』は『シチュエーション』の略

……あ♡

そうだ。

先輩が新アカであげてた漫画にも、授乳シチュありましたよね♡

あの漫画、すごいえっちでした♡

ずっと好きだった幼馴染が、自分専用の性処理係（がかり）になるって。

夢の展開ですよね♡」※

しかし、ここで意外な話題がふられる。

なので主人公は、

……あ！　そういう事か……！

だから昨日からあんなに、おっぱいアピール激しかったのか……！

と、ついに昨日からの七緒の行動の理由を理解した。

確かに主人公は先日『好みのシチュエーション詰め込みました』というキャプションで漫画を投稿した。

それは端的に言う『一見、性処理係もの。しかし実態は、両片想いのラブラブセックスもの』で、詳しくは次のような内容だ。

「あらずじ」

■主人公は、現実とはちよつと違う常識の世界に住んでいる学生

■その世界には、特定の人間の性欲を一对一で処理する『性処理係』という特殊な職業が存在する。だが、主人公はそれに縁はなく、平穏な毎日を送っていた

■そんなある日、ずつと好きだった幼馴染の女の子（以後『係ちゃん』）が、突如『主人公専用の性処理係に任命された』と言ってやってくる

■主人公はそれを内心『夢のようだ』と思いつつも『大切な幼馴染にそんな事はさせられない』と踏みとどまり、断ろうとする

■しかし、実は係ちゃんもまた、ずつと主人公の事が好きだった

■なので係ちゃんは、仕事を口実に、何が何でも主人公とセックスがしたい。そこで、想いを秘密にしたまま主人公のもとへ押し掛け続ける

■その甲斐あって二人は、なし崩し的にセックスする関係になる

■これによって係ちゃんは、さらに積極化。『私は主人公の性処理係である』事を大義名分に、毎日のように主人公を襲い、どんどん濃厚なプレイをするようになっていく

■だが、最終的にはずっと昔から両想いであつた事がわかり、ハッピーエンド

……このように本作は、アダルト作品の人気ジャンル『性処理係』を題材にしているものの、実際は『係』という言葉の意味する『義務感』『仕事感』『不特定多数を相手にする感』がまるでない、一対一のイチラブものだ。

他の登場人物はおらず、二人の恋を邪魔するのは『自分は片想いである』という思い込み一点だけである。

主人公は、これをやはり『性処理係もの』というよりも、『両片想いのままセックスしなくなる話』という認識で描いた。

具体的には七緒と交際する前の日々を反芻し『たとえば初めてお泊まりした日、何かの間違いでえっちしちゃって。でもわたしがすぐに『好きです』って言えずにいたら。『付き合っていないのにセックスする』とかって関係になってたのかなあ……。わたしたちのキャラ的に絶対あり得ないんだけど……。』と夢想しながら制作した。

それに近いシチュエーションを再現しようとした結果、とにかく便利な『性処理係』というジャンルに助けてもらい、完成に至ったのだ。

そしてその漫画には、確かに授乳シチュエーションがあり、係ちゃんは巨乳だった。

なので主人公が

だから、なーは『漫画と同じ事をしよう』と思ってこの話を振ってくれたのかな……。ていうか、昨日はうっかり聞けずじまいだったけど。

もしかして新アカにあげた作品、全部見てくれたのかなあ……。

性癖全開のえっち漫画まで読んでくれたなんて、恥ずかしいけど、すげえ嬉しい……。

と思っていると。

七緒が作品の感想を述べてくれた。

※以後すべて『性処理係』は『せいしより【が】かり』

『係ちゃん』は『【か】かりちゃん』と読んでください

● 正面 30センチ

「【※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。

『性処理係』ジャンルについて語る。

七緒はすでに『アダルト音声作品』をかなり研究している。

例の『むーちゃんの声優さんによる全年齢ASMR作品』の一件から、ものすごく音声

作品の勉強をしたので。

なので、その結果培った、自分なりの見解を述べる。

『ヒロインが主人公の性欲を処理するために、仕事として性的な行為をする』というジャンルは非常に人気で多岐にわたるが、七緒が見た限りでは次のような傾向があるので何（なん）か、性処理係ジャンルって。

最終的に係（かかり）ちゃんと付き合う話は結構あっても。

最初は『同じクラスってだけ』とか。

あんま親しくないパターン多いじゃないですか。

だから、片想いの子が係になるシチュは、ちよいレアで新鮮でした♡

【きゃっきやと嬉しそうに。

自分と主人公で同じシチュエーションを想像したので】

本当はずっとお互い大好きなのに、両片想いのままえっちしまくるってすごい興奮しちゃう♡

【一呼吸おいて。

にやにやと嬉しそうに。

特にこれが言いたかったので。

漫画の主人公は『優しく良識的だが、優しすぎるがゆえに、係ちゃんの誘いを断れない』『その上押しにも快感にも弱く、係ちゃんに始終振り回されっぱなし』『しかし、肝心な所

では係ちゃんの暴走にブレーキをかけるし、また、常日頃から、彼女の自尊心が損なわれないよう、完全に恋人扱いしている。なので、それがますます係ちゃんを夢中にさせる』という人物だった。

また『押しに負けつつも、相手をいたわりながら濃厚セックスする』という描写が非常にねちっこく『ああ、先輩の性癖の神髄はここなんだ。相手がやりすぎないように気を遣いながら、でも性欲全開のセックスはしたいんだ』と理解したので」

てかあの主人公、優しくて、何（なん）か先輩ぽくて♡

私、係ちゃんに感情移入して読んじやいました♡

あの主人公もおっぱい大好きでしたしね♡」※

〈主人公〉

「!？」

主人公、七緒の指摘に

……そ、そうかあ？

似てるかなあ？ わたしと、あの漫画の主人公。

……確かにまあ、おっぱい好きなのは共通してるし。

人間的にも好感の持てるやつにしたいなあと思って描いたから、そう言ってもらえるのは嬉しいけど。わ、わたし、あんなにエロに弱いかなあ……？

『性処理係なんてダメだ！』って言った直後に、裸で涙ながらに迫ってくる係ちゃんを追いつまなくて。それどころか『これ以上恥をかかせられない』とか言ってセックスするかなあ……？

あれはこう、エロ漫画特有の『エロに対するハードルが妙に低い』世界観だからあり得る展開だと思ってたんだけど……。

——いや、やっぱり指摘の通りかも。

もしなーが同じ事して来たら、多分、わたし断れない……。

と衝撃を受け、内心うろたえる。

そんな主人公の胸中を知って知らずか、七緒は話を続ける。

● 正面 30センチ

「【※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。くすくすと嬉しそうに。

さらにもっと乳首を吸うように促す。

また『専用』という、主人公の漫画でも用いられたフレーズを使って興奮を煽る」

ふふ♡

ほくら♡

先輩専用のお乳飲んで大きくなろうね♡

【低く、小さく喘ぐ。】

特に感じる強さで乳首を吸われた上、主人公の手による、吸われていない方の胸への愛撫もいよいよ本格化してきて、あまりにも気持ちいいので」

ん……♡

【※6回※ 少しゆっくりめに呼吸する。】

『ゆっくりめ、穏やか』から『少し早め、やや荒い』呼吸になっていく。

快感に耐えつつも、だんだんこらえきれなくなってくる。

また『授乳プレイ中に喘ぐ・喘がない問題』については、考えすぎた結果訳がわからなくなり、結論を放棄した。

よって、その場の己の判断にゆだねる事にしたので」

はあ、はあ。……はあ♡

はー。はー。はーっ……♡

【※4回※ 少しゆっくり呼吸する。】

快感が少し緩やかになり、耐えられそうになってきたので」

ふー……ふー。

ふー……。ふーっ……。♥

【小さく、ため息をつくように喘ぐ。

ものすごく気持ちいいが、ギリギリ余裕があるので】

はあ……。♥

【一番言いたい事を切り出す】
ていうか。

【主人公の作品のヒロインに対抗して『自分だったらもっと積極的に迫る』と主張し始める。七緒には、自分に自信を持ってないあまり、すぐに仮想敵を作っては張り合おうとする傾向があるので。

しかし、七緒自身その自覚はある。

なので、今はむーちゃんや主人公の作品のヒロインのような『架空の存在』相手のみにとどめている】

私も先輩の係ちゃんになったら、絶対張り切っちゃいます。

好きになってほしくて、どんな事でもするし。

毎日

【少しでも淋しそうに、残念そうに。
やや『セリフ感』のある言い方で】

『今日はしないんですか？』

【元の話し方に戻って】

って誘っちゃいそう。

【少し間をあけてから】

例えばこんな風に。

【とびつきり媚びてあまあまに。

『セリフ感』たつぷりに言う。

『透明のとりとろ』は『愛液』という意味で言っている】

『先輩♥ 今日まで疲れてねんねするまで、なーを使って一杯気持ちなくなっ
てね♥ おっ
ぱいもおまんこも先輩の好きなように犯して。

透明のとりとろ、一杯なーに擦り付けてイってね♥』

【さーと元の話し方に戻って。

そうする事で冗談めかしたり、主人公を動揺させたりしようとしている。

しかし、先ほどの言葉はすべて本気。

実際にそのような関係性になったら、確実に自分の身体全てを使って必死で迫る確信がある。

ここの『なーんて』は『なんて』が伸びた形のもの」
なーんて言って♥ 誘惑します♥※

〈主人公〉

「……！」

主人公、

——やっぱり。やっぱり、そうなんだ……！

なーの……そういう所が……わたしはさあ……！

と、七緒の発言にどきとしつつも、同時に、言いようのない苦しさに襲われる。そう。主人公はかねてから、七緒にはそういった危うさがあると思っていた。

それは嫌な言い方をすれば『自傷体質』『愛人体質』というやつだ。

七緒には、自分に自信を持てず、それゆえに自分を大切にできない一面がある。

また、傷つくのを恐れるあまり本心を告白するのを恐れ、そのせいでますます自分を追い詰めてしまうところもある。

それらの気質は、現在ではおおむね改善、あるいは緩和された。

今の七緒は交際前よりもずっと笑顔が増えたし、のびのびしていて、幸せそうだと思う。だが、今もどこか『好きな人に好かれるためならば、平気で身体を差し出しそう』『その上『自分は一番じゃない。愛人とか、セックスフレンドで構わない』とか言い出し

そう』『つまり、進んで都合のいい女性になってしまいそう』と思わせる雰囲気があるのも、また事実だ。

たとえばそれは今のうちに、想像上の話をする時に感じ取れる。

だから主人公は、七緒のこのような一面を心配する気持ちと、そんな彼女で思わずいやらしい妄想をしてしまった罪悪感を抱き……その葛藤が、あの作品となって生まれたのだ。

●正面 30センチ

「【※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。にやにやと嬉しそうに。

今日も主人公が、自分の誘惑に乗ってくれたので。

しかし、実際に今主人公がどんな事を考えているかについては、まるで気づいていない。ただ『主人公が七緒の言葉に興奮して、股間をむずむずさせている』『だから、早速すっきりさせてあげよう』としか思っていない」

あゝ♡

早速むずむずしちゃったあ？

おまんこ切ない？

よしよし♡

じゃあ今日は♡先輩専属性処理係のなーが♡

全部満足させてあげますからね♥」※

しかし七緒は、そんな主人公の苦悩にまるで気づいていないようだ。
とことん己について鈍感なまま、主人公に奉仕してくる。

SE 6 七緒がベッドの上で少し身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

SE 7 七緒が引き出しを開けて、閉じる音

【最初から最後まで流す】

SE 8 七緒がローションのふたを開ける音

【最初から最後まで流す】

● 正面 30センチ

「【にっこにこと上機嫌で。

指につけたローションを見せつけながら。

『ぬるぬる』は『ローション』、『クリちゃん』は『クリトリス』という意味で言ってい

る」

はい♡

ほーら♡

先輩の好きなぬるぬるだよ♡

毎日いく大切なクリちゃんですから。

擦れて痛くならないように♡

ちゃんとローションつけてしようね♡

【穏やかに、にこにこ上機嫌で。

さらっと、当然のようにガニ股になる事を強要する。

七緒は主人公に恥ずかしい格好をさせる事が大好きなので」

ほら。足開いて♡ ガニ股して♡」

〈主人公〉

「……♡」

しかし、この話が厄介なのは『七緒は、奉仕的な性格ゆえのS気質である』という事だ。七緒は自身を軽度のSだと認識しており、その認識は正しい。

この通り、主人公に恥ずかしい行動を促しては喜んでいるし、彼女と嗜好の合う主人公

もまた、いつもそれに大喜びで応えている。

だから二人は、一見相性のいいカップルだ。

だがそれゆえに、彼女のもう一つの性質である『奉仕的過ぎる』事への問題は表面化しないまま、今日に至る。

主人公は七緒の、サービス過剰な位愛してくれるところが大好きだ。

たとえばセックス一つとっても、こちらを飽きさせないよう、沢山の工夫や努力を凝らして触れてくれるところが大好きだ。

その『仕事の細やかさ』というか、真摯さ、丁寧さが七緒の魅力だと思うし、恋人としても、単純にとっても嬉しい。

だがそれを、同じ位申し訳なく、また、痛々しく思う事がある。

主人公は七緒にめちゃくちゃに攻められる事が心底幸せだし、それが七緒の嗜好を満たしている事も理解してはいる。

だが時折『本当にこのままでいいのか』『自分はもっとやれる事があるのではないか』と感ずる事があるのだ。

だけど……七緒から与えられる快感は強すぎて、甘美すぎて。

押し流されてばかりなのも事実で……。

確かにこれでは、主人公は本当に、あの漫画の主人公にそっくりだ。

SE9 主人公がベッドの上で少し身体を動かす音

●正面 30センチ

主人公が従順に股間を触らせてくれるので。

は
し、
は
し
……
♡

SE10 七緒が、主人公の性器を指で愛撫する音

【繰り返して流す】

【▲ 1 で速度が一段階早くなる】

そんな事を考えている間に、とうとう七緒の指が主人公のクリトリスに触れる。

足を開いたせいですっかりめくれ上がったスカートをよけると、七緒はその下にあるシ
ョーツの中に手を入れ、ゆっくりと愛撫してきたのだ。

どうやら今日は、下着を穿かせたままするつもりらしい。

つまりそれは『汚れた下着で帰宅しろ』という事だ。

桐生家には、主人公の下着が常備されている。

だから、替えて帰る事自体は可能だ。

だが、きつとお願いしないと替えさせてもらえないだろうし、お願いしてもなお『この
まま帰れ』と言われるかもしれない。

七緒は主人公の、汚れた下着にばかり意識を割かれて、心許なさそうに、もじもじと歩
く様が大好きだからだ。

それだけではない。七緒は着衣プレイが大好きで、ありとあらゆる服装、下着の主人公
と『着せたまま』セックスしたがる。

そして後日『あーこれ、私とえっちした時に着てた服ですね♥』と主人公をからかって
はじめる事を、もはや楽しみの一つにしているのだ。

七緒はよく主人公の事を変態扱いするが、七緒はそれ以上ではないかと、主人公はよく
思う……。

〈主人公〉

「……っ ♡ あ ♡ ああっ…… ♡」

● 正面 30センチ

「息をつく。興奮しすぎないように気を付けている」
ふうっ…… ♡

「あまあまに優しく。」

主人公がとても気持ちよさそうなので
んー？ クリさん気持ちいい？
よかったね ♡

【※5回※ ゆっくりめに呼吸する。だんだん少し早くなる。
興奮している。

主人公がとても気持ちよさそうなので

はあっ…… ♡ はあっ…… ♡ はー……っ ♡
ふー。ふーっ…… ♡

「くすくすと嬉しそうに。」

主人公が、クリトリスへの快感に気を取られるあまり、七緒への愛撫を忘れてしまって

いるので。

『それほどまでに気持ちいいのか』と思うと、安心感と優越感で満たされるのであ。ほら。忘れてるよ。ちゃんとお乳も飲も？

【にやにやと嬉しそうに。

今、主人公の置かれている状況を述べる事で、興奮を煽っている】
おっぱいのつけられて♡
顔一杯に重さ感じながらちゅっちゅするの好きでしょ？」

〈主人公〉

「ん……っ♡」

●正面 30センチ

「※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。

※6回※ ゆっくりめに、少し荒く呼吸する。

主人公が胸への愛撫を再開し、それがものすごく気持ちいいので
はあっ、はあっ、ふー……。

はあっ。はあっ♡ ふー……♡

【うっとり嬉しそうに。

主人公がとても気持ちよさそうなので」
気持ちいい？」※

〈主人公〉

「あ……っ♡ んっ……♡ んう……♡」

● 正面 30センチ

「【※マークまで、快感で少し苦しそうに、でもにやにやと。

主人公の一番好きな所を丁寧に愛撫しながら。

また、こうしていないと、主人公から与えられる快感に負けそうなので」

そう♡ ここ先輩の一番好きなところ♡

ここ♡ この強さで♡

すりすり♡ すりすり♡ すりすり♡ すりすり♡

ってしながらいくのがいいんだもんね？

【※5回※ ゆっくりめに、荒く呼吸する。

主人公が負けじと愛撫してきて、油断すると声が出そうなほど気持ちいいので」

はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡

ふーっ。ふー♡

【※3回※ ゆっくりめに、かなり荒く呼吸する。

一つ前よりも苦しい。

必死で快感をこらえている】

ふー……♡ ふー……♡ ふー……♡

【※5回※ ゆっくりめに、荒く呼吸する。

一つ前より楽になる。

主人公からの愛撫が、やや弱まったので】

はー♡ はー♡ はー♡

ふー。ふー♡

【にやにやと嬉しそうに。

たった今の主人公のリアクションを述べる事で、興奮を煽っている】

……あ♡

背中 of けぞっちゃったね♡】※

〈主人公〉

「あ……♡ あっ……♡ んううう……♡」

このように主人公は今、七緒によって優しく、丁寧に、安心感たっぷり。

そして穏やかに、ねっちりと征服されながら愛撫され、あっという間にイきそうになっていた。

昔読んだヤングアダルト小説に『私と恋人は、五分あれば相手をイカせる事ができる。それ程、お互いの身体を知り尽くしている』という性描写があった。

それを読んだ時、主人公は『そんなの可能なのかな。自分でしたってもっとかかるのに……』と思ったものだ。

だが、七緒はそれを実際に可能にする。

容赦なく的確に。

でも、じつとりと余韻が残るほどしっかりと。

主人公を犯す事に、あまりにも慣れてすぎていて。主人公は、いつもあっさり負けてしまふ。

●正面 30センチ

「【※マークまで、快感で少し苦しそうに。

とても優しく。意地悪な要素のない声で。

七緒は主人公を攻め、主人公が気持ちよくなっているととても安心し、征服欲が満たされる。

また『主人公の理想のセックスをしてあげたい』という気持ちがより強固になる。

その結果、自然ととても優しい声になる」
もうイきそう？ いいよ……イって。

【優しく。

主人公はいつも、仰向けで抱かれる時、背中をびくつとのけぞらせて絶頂するので」
お背中ビクッってなる♡」※

▲1 ここでSE10の速度が一段階上がる。

七緒、少し近づく。

●正面 15センチ

「※マークまで、快感で少し苦しそうに。

※3回※ かなり早く、深く、荒く呼吸する」
はあ。はあ。はあ。

【※4回※ 早く、深く、呼吸する】

はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡ はーっ……♡

【優しく】

いいよ。イって。

【少し早口で。興奮で少し早口になっているので】
イってイって♥ イって♥

【※3回※ 早く、浅く呼吸する。

主人公がいよいよ絶頂しそうなので】
はあ。はあ。はあ。

【※3回※ 早く、深く、荒くに呼吸する。

主人公がいよいよ絶頂しそうなので】

※『そろそろ絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします
はーっ……♥ はーっ……♥ はーっ……♥

【少し早口で。興奮で少し早口になっているので】

イーけ♥ イーけっ♥ ※

〈主人公〉

「あぁっ……♥」

● 正面 15センチ

「【少し驚いたように、だが嬉しそうに小さく喘ぐ。
ここで主人公が絶頂する。

主人公が、七緒が促した通りに、背中をびくつとそらして絶頂したので」

※『ここが絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします

あ……！」

こうして主人公は、今日もあっけなくイカされた。

強い快感が波のように押し寄せ、それからすぐにじんわりとした快感が、触れられたところから身体中を埋めるように広がっていく。

それは温かくて、ふわふわして、幸せすぎて……主人公は少しでもこの気持ちよさを逃すまいと、無意識のうちに身体を丸めてしまう。

そして、

——気持ちいい。やばい。

今日も、すっごいよかった……。

と、身も心も満たされ、途端に瞼が重くなってくる。

▲ 2 ここでSE10がフェードアウトする。

●正面 30センチ

「※3回※ かなり早く、深く、荒く呼吸する。

※『絶頂ポイントを迎えた後』と伝わるように、わかりやすくお願いします
はあ、はあ、はあ。

「とても優しく。意地悪な要素のない声で。

主人公が自分の手で絶頂した事がとても嬉しく、自尊心が満たされたので」

ふふ♡ よくイけました♡

えらい♡

今日も上手に気持ちくなれたね♡」

SE11 七緒が、主人公に近づく音

「最初から最後まで流す」

七緒、近づいてキスする。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。軽く唇にキスする」

ちゅ♡

〈主人公〉

「はあ、はあ、はあっ……」

主人公、あまりの快感の強さに、思わずこのまま目を閉じてしまいそうになる。

セックスした後、そのまま寝てしまう。確かにその選択をする日も、あってもいいと思う。

でも、今日はそうしなかつた。

『主人公は、ここで意識を手放した』なんて風に章を切り上げていいのは、とりあえず今じゃない。

もし、主人公が自作の主人公と似ているというのなら。主人公には、まだやる事がある。そう思ったのだ。

〈主人公〉

「あのっ……。なし。」

今って……。何分だ……。？」

だから主人公は、何とか力を振り絞って手を伸ばす。

キスしてそのまま離れようとする七緒の手を握り『このまま受け身で終わらない』というサインを出す。

主人公が描いた漫画では、係ちゃんは授乳プレイの後、一方的に主人公をイかせ、さらにもう一回イかせようとしてくる。

その時点での彼女には『自分が気持ちよくなる』選択肢がない。

だから、ただただ主人公に快感を与えようと、痛々しいまでに努力するからだ。だから、七緒ももしかすると、これからそれを再現しようとするかもしれない。でも、それは違うだろう。

だって七緒と主人公は『性処理係と、それを享受する人間』の関係じゃない。だから、そのようにはさせたくなかったし……そもそも、あの漫画の主人公だって、最終的には自分達のその関係を変えするため、勇気を出したのだ。

作者の主人公が、同じ以上の事をできないはずがないだろう。

● 正面 0センチ

「【※3回※ ゆっくりめに呼吸する。

大分落ち着いてくる」

はー……♡ はー……♡ ふー……♡

【少しドキツとして。

内心少し期待しながら、質問に答える。

主人公が不意に自分の手を握ってきたので。

七緒は『まだ時間があるし、あの漫画の通り、もう一回気持ちよくしてあげようかな』
と思っていた。

だが、主人公はそれを望んでおらず、他の事をしたがつていように見えたので「
ん？ 四時十分です。」

まだちよつと時間ありますよ」

主人公、握った手を開かせると、ぎゅっと指を絡める。

すると、七緒がドキッとしたようにこちらを見た。

最低限過ぎるにもほどがあるが、それでもなんとか、言いたい事は伝わったらしい。

七緒は主人公を切なげに見下ろすと、おずおずと。だけど、さつきとはまるで違う声
で、主人公を誘ってきたからだ。

● 正面 15センチ

「少し甘えた声で。

勇気を出して『もう少しセックスできるか』とたずねる。

主人公が手を握ってきた事で『漫画と同じ展開じゃなくて、自分のしたいセックスをし

でもいいかもしれない』と思い始めたので」
ねえ。まだできますよね？」

SE12 七緒が、ベッドの上で動く音2

【最初から最後まで流す】

●正面 15センチ

「【照れ笑いして。

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに】

へへ。

ほら見て？」

〈主人公〉

「……？」

七緒がふいにベッドの上に寝転び、仰向けになる。

それから、主人公に向かって、両足を、お尻全体が見えるほど上げる。

驚いた主人公が、思わずそれを凝視すると……お尻側からショーツを見せつけて、恥ず

かしそうに笑い……そのまま、それをおろした。

SE13 七緒が、下着を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

●正面 30センチ

「照れ笑いして。

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに」

お股濡れすぎて、

【一瞬間をあけてから。

照れ笑いして、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。

本来は『お股濡れすぎて、やばい』と言おうとしていた。

しかし脱いだ途端、糸を引いている事に気づいたので」

糸引いちやった……♡」

〈主人公〉

「……♡」

辺りに、愛液独特の、むわっとした匂いが広がる。

主人公は未だにこの匂いを表現する言葉を知らず、ただ、かぐ度に毎回、激しい性的興奮に襲われる。

●正面 30センチ

「照れ笑いして。

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。

今日は残りの時間も、あの漫画のように『自分は奉仕に徹する』スタンスでいた。

なのに、結局自分も気持ちよくなりたくてたまらないのだと、自覚してしまったので」
はは♡

ごめんなさい。私もすっごいしたくなってたみたいです♡
だから」

ただわかるのは、今、自分も七緒も、一緒に気持ちよくなりたいと思っている事だ。

どちらか一方が奉仕する関係じゃなくて。お互い与え合う事で、この時間を過ごしたい
と
思っている事だ。

主人公と七緒が同時に近づき、七緒が、主人公の左耳にささやく。

それは本当に、脳がとろけてしまいそうなほど甘い一言だった。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「甘々に、真剣に」

ね。先輩。

しよ？

セックス。しよ？」※

ここでフェードアウトして終了。